自閉スペクトラム症児者の心の理解

◉すれ違いの原因を一方に押し付けるのは間違い

これは、自閉スペクトラム症の当事者である綾屋沙月（あややさつき）さんの言葉です。[1]「他者の心理を推論し合いながらコミュニケーションを行う状況において、すれ違いが生じることは日常的にありふれた光景であり、そのすれ違いの原因を一方の側（自閉スペクトラム症児者：筆者註）に押し付けるのは間違っている」（77頁）。自閉スペクトラム症児者と障害をもたない人との間にコミュニケーションのすれ違いが生じた場合、その原因は自閉スペクトラム症児者が障害をもたない人の心を理解できていないことにあるととらえられがちです。しかしこれは、障害をもたない人の心の理解を、唯一絶対なものとみなしているからうまれるとらえ方です。自閉スペクトラム症児者も彼・彼女なりの心をもっています。そうだとすればすれ違いが生じているときは、障害をもたない人も自閉スペクトラム症児者の心を見失っているはずではないかということなのです。

心は瞬時に変化し、自分でもとらえどころがないものです。そして相手の心を完全にわかることはありません。そうなったら相手と自分は同じになり、自分が消えてしまうからです。でも一方で、コミュニケーションは双方向的なものです。完全にわかることがないことを前提に、しかしお互いに相手をわかろうとする姿勢は、人と関係を取り結んでいくうえで欠くことができないのです。

自閉スペクトラム症を人とやりとりする能力（社会性）の障害とする現在の優勢な見方は、人と関係を取り結ぶことができない状態を引き起こす要因が、自閉スペクトラム症児者にのみあるというとらえ方を強めています。関わる側が、目の前の自閉スペクトラム症児者のことをもっと知りたいと思い、わかろうとする姿勢をもつことこそが求められていると感じるのです。

第3回
心の支えとなる人

別府 哲（岐阜大学）

べっぷ　さとし／岐阜大学教授。自閉症児・者の発達や指導をライフサイクルを通して研究。著書に『自閉症児者の発達と生活－共感的自己肯定感を育むために』『障害児の内面世界をさぐる』（以上、全障研出版部）など。現在、全国障害者問題研究会常任全国委員。

◉一緒に笑いあえる存在としての人に気づく

そう考えれば、人とうまく関わることができないことも、自閉スペクトラム症児者だけの要因ではなく、お互いの関わりのなかでそういう状態をつくり出しているというとらえ方が大切になります。例えば、感覚の過敏さや物事のとらえ方の特徴などにより、目の前の自閉スペクトラム症児者が楽しめる世界と、まわりの大人が「子どもにとって楽しいだろう」と思って提供する世界がずれやすいことがあります。部屋にあるたくさんのおもちゃでなく、隅にある小さな換気扇に注意の焦点があたり、それがクルクル回るのを見る視覚的感覚が楽しい子がいます。しかしまわりはそれをこだわりと感じ、多くの子が楽しいと思いやすい玩具にばかり誘おうとする。それで子どもが怒ってしまうことなどはその一例です。

その結果、通常であれば自然にできる、人と一緒に笑いあえる経験がとてもつくりにくくなります。それが結果として人とうまく関われない姿をうみだしてしまうのではないか。だからこそ、自閉スペクトラム症児者にとって楽しい世界を用意し、それによって人が一緒に笑いあえる存在であることに気づくことができるようにすると、人との関わり方が大きく変化するのです。

しかし、人が一緒に笑いあえる存在であることに気づきさえすれば、その後、人との関わりにくさがなくなるわけではありません。今回はこのことを一つの教育実践記録（安村由紀子氏「自閉症のみんなと私」）を通して考えてみます。

◉とても手のかかる、でもおもしろい子

安村さんは特別支援学級の担任となり6年の康太くん